

北国エピソード史

<4>

●その昔、二宮尊徳の門下生が、つくりあげた創成川。札幌の手によって、この川は札幌をそのまは流れている。

本流は、豊平川支流の鴨川から発し旧石狩川に注ぐまで、全長約27.7km。いくたびか濁流と流れを変えて、今日の創成川になった。一〇八年前の慶応二年、二宮門下の幕僚、大友龜太郎によって開闢されたが、この川の始まり。大友は、本流を現在のお狩師橋の下あたりから北東に向け、さらに

創成川

に南東に向けて、札幌府役場（現東区役所合庁）の裏側に通し、伏古川に注がせた。人々はこれを百万両の大工事といひ、完成した人工の水路を、大友製工呼んだ。創成川とよづけられたのは、通水してから八年後の明治七年のこと。◆大友は、開拓使の常用吏目、旧領の用本給のほかに、運河の役目も兼たし、舟に乗り、みだ、しょう池などを観て、石狩川・伏古

川・大友編と流る。札幌（公園）麻付社の倉庫（へ運び込んだといふ。一方、札幌に開拓使本府が開かれるようになると、札幌へ札幌

へとはなれまう。大量の牛馬物資が必要となる。もはや輸送本流の安易は、時代の要望でもあった。そこで、函館から海路で石狩湾に届いた物資を最良コースで輸送しよう。明治二十八年、道庁の四代表官北原國造は、北六条橋から北へ一直線に水路を掘って、英戸まで開削。この新しい水路は、

いまでも創成川下流は、平田舟が上り下りした往時の姿がうかがわれる。●中田三幸付迄。

郷愁をそそる流れ



大友龜太郎



当時「新川」と呼ばれた。開削の大量の土を盛ってできたのが石狩街道だといわれる。大友編の北六条・伏古川間は、大正十四年ごろ本格的に埋め立てられたため、現在、堀の面影は残っていない。◆「新川」の湧出場所は、かなりの近代的手法を導入。英戸から北六条間の八き所に「開（こう）門」を設け、舟が一区間進むごとに門を閉じ、水量をたくわえては進む方式。世界に名高いこう門式パナマ運河のできる八年前のことというから驚く。舟は「機舟を大きくした感じで、帆もついていた」と昔から川を見守ってきた鞍馬の和田浩さん（70）は、往時をなつかしむ。

◆大友編の昔から今日の創成川にいたるまで、悠久の流れは札幌の今昔を静かに物語っている。「いわば私たちの、郷愁の川。ですわね。水（川）のない都市はいつかは滅びる。百の噴水より一つの川をみんな大切にしなれば」と北區在住の郷土史家小泉川重雄さん（70）は語る。